

# 「介護過程」授業研究（2年間の取り組み）

## —「介護過程」授業が目指すもの—

### The Study of Teaching “Care Process” (For 2 Years Work)

#### -Teaching “Care Process” aim for -

根本 曜子<sup>1</sup> 古川 繁子<sup>2</sup>

介護福祉士養成課程の新しいカリキュラムがスタートして、2年が経過した。「介護過程」150時間の2年間にわたる授業を振り返った。1年目の反省を反映させた2年目の取り組み、「介護過程Ⅳ」で行われた「事例研究」とその要項、「事例研究発表会」を振り返ることで、介護福祉士養成における「介護過程」の意義がはっきりしてきた。「介護過程」授業の目指すところは資格取得後の「求められる介護福祉士像」に自ら近づく力を養うことだということがわかった。

キーワード：介護過程、事例研究、求められる介護福祉士像

#### 1. はじめに

2009年に介護福祉士養成課程のカリキュラムが改正された。「他の科目で学習した知識や技術を統合して、介護過程を展開し、介護計画を立案し、適切な介護サービスの提供ができる能力を養う」というねらいで、それまで数科目の中で学習されていた介護過程が独立した科目となった。本学の「介護過程」は150時間のうち、1年次後期30時間の講義、2年次前期事例による演習60時間、2年次後期チームアプローチについての演習30時間、実習で実際に展開した持ち帰った事例研究演習30時間から構成されている。この2年間にわたる「介護過程」の授業を振り返り、今後、「介護過程」授業の目指すところを探りたいと考えた。

#### 2. 授業の概要

##### 1) 2009年度（1年目）

2009年度（1年目）は1年課程の専攻科において、「介護過程Ⅰ～Ⅳ」の授業が行われ、3人の教員が授業に当たった。2年課程では「介護過程Ⅰ」のみが行われ、4人で担当した。カリキュラムと「介護

過程」及び実習の関係は表-1の通りである。前期に「介護過程Ⅰ、Ⅱ」を同時進行で学ぶ。

その後、第Ⅰ段階実習に行き、後期、第Ⅱ段階実習後、「介護過程Ⅲ、Ⅳ」を学ぶ。実習後、「介護過程Ⅲ」チームアプローチの学習を進めながら、「介護過程Ⅳ」で事例研究を行った。「介護過程Ⅳ」の授業では実習中に行った介護過程の展開事例の検討を行い、事例研究発表会を行った。そこに「介護過程Ⅰ」を学んだ1年生が参加した。

##### 2) 2010年度（2年目）

2年課程の介護過程はⅠ～Ⅳに別れ、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲは4人の教員で担当し、Ⅳは事例研究を全教員が担当した。「介護過程」の授業担当教員間のコンセンサスを作るため、「介護過程」担当の教員間でおおむね月1～2回ミーティングを開き、「介護過程Ⅱ」については介護総合演習担当教員が加わる機会を持ち、実際に実習で使用する介護過程展開シートを作成した。「介護過程Ⅲ」は本学に在籍する多職種の教員の協力を得て、ケアマネージャー、看護師、介護福祉士による講義を加えて、行った。「介護過程Ⅳ」は学生がグループに分かれ、それぞれに教員

1, 2 植草学園短期大学

表-1 新カリキュラム1年課程の科目と実習の関係

	前 期	後 期
専 門 科 目	介護保険制度とその他の諸制度	介護福祉特論
	介護の基本Ⅰ	介護の基本Ⅲ
	介護の基本Ⅱ	コミュニケーション技術Ⅱ
	介護の基本Ⅳ	介護支援技術Ⅵ
	介護の基本Ⅴ	家事生活支援技術Ⅰ
	介護の基本Ⅵ	家事生活支援技術Ⅱはったはったスト
	コミュニケーション技術Ⅰ	老化の理解Ⅱ
	生活支援技術	認知症の理解Ⅱ
	介護支援技術Ⅰ	障害の理解
	介護支援技術Ⅱ	
	介護支援技術Ⅲ	
	介護支援技術Ⅳ	
	介護支援技術Ⅴ	
	発達と老化の理解Ⅰ	
	認知症の理解Ⅰ	
	こころとからだのしくみⅠ	
	こころとからだのしくみⅡ	
介護総合演習Ⅰ		
介護過程Ⅰ	介護過程Ⅲ	
介護過程Ⅱ	介護過程Ⅳ	
	介護総合演習Ⅱ	
選択 科目		在宅における医療処置
実 習	↔	↔
	Ⅰ段階6日間	Ⅱ段階20日間

が加わり、実習中に行った介護過程の展開事例の検討を行い、事例研究発表会を行った。

2年課程のカリキュラムと「介護過程」及び実習の関係は表-2の通りである。第Ⅰ段階の実習が終わり、後期に入って、「介護過程Ⅰ」、その後、第Ⅱ段階実習。2年生前期で「介護過程Ⅱ」で事例演習をし、9月に第Ⅲ段階実習に行き、個別介護計画の対象者を決め、基本的な情報を収集し、10月の第Ⅳ段階実習でアセスメントを進め、計画の立案、実施、評価を行った。また、第Ⅲ段階と第Ⅳ段階の間に帰校日を設け、「介護過程Ⅳ」の授業として、第Ⅲ段階の介護実習について、振り返りを行った。実習後、「介護過程Ⅲ」チームアプローチの学習を進めながら、「介護過程Ⅳ」で事例研究を行った。

#### ①介護過程Ⅰ

「介護過程Ⅰ」総論的な内容で、「介護過程の意義、目的、内容、展開方法について学ぶ」が授業目標である。授業の第1～3回目で意義、目的、基本視点、要素について講義。第4～6回目で介護過程が展開される現場を知るために、介護施設の従来型とユニットケアのDVDを鑑賞して、介護の違いについて理解する。他のDVDでグループホームでの介護過程の展開の様子を見て、その様子をケアの内容の順を追って記録させる。そのことから、介護過程の各要素（アセスメント、計画、実施、評価）に分類し、各要素を具体的に理解させるよう努めた。さらに記録の重要性を講義した。第7～10回は介護過程と生活支援の関係を講義した。第10～14回で介護

表-2 新カリキュラム2年課程の科目と実習の関係

	1 年		2 年	
	前 期	後 期	前 期	後 期
専 門 必 修 科 目	人間関係とコミュニケーション 生活と福祉 介護の基本Ⅰ 介護の基本Ⅱ 介護の基本Ⅴ 生活支援技術 介護支援技術Ⅰ 介護支援技術Ⅱ 介護総合演習Ⅰ 発達と老化の理解Ⅰ 認知症の理解Ⅰ こころとからだのしくみⅠ こころとからだのしくみⅣ	人間の尊厳と自立 介護の基本Ⅲ コミュニケーション技術Ⅰ 介護支援技術Ⅲ 介護支援技術Ⅳ 介護支援技術Ⅴ 介護総合演習Ⅱ 発達と老化の理解Ⅱ 認知症の理解Ⅱ 障害の理解Ⅰ こころとからだのしくみⅡ こころとからだのしくみⅢ  介護過程Ⅰ	介護保険制度のその他の 諸制度 介護の基本Ⅳ 介護の基本Ⅵ コミュニケーション技術Ⅱ 介護支援技術Ⅵ 家事生活支援技術Ⅰ 認知症の理解Ⅲ 障害の理解Ⅱ  介護過程Ⅱ	介護福祉特論 家事生活支援技術Ⅱ        介護過程Ⅲ 介護過程Ⅳ  介護総合演習Ⅲ
地域共生論				
選択 科目	カウンセリング		人間関係論 障害教育	施設経営 在宅における医療処置 ボランティア体験実習
実 習	↔ Ⅰ段階 6日間	↔ Ⅱ段階 9日間	↔ Ⅲ段階 13日間	↔ Ⅳ段階20日間

過程の全体像とその要素それぞれについてさらに講義した。第15回は2年生と専攻科の事例研究発表会に参加した。

②介護過程Ⅱ

「介護過程Ⅱ」のねらいは「様々な事例における介護過程の実践的展開を行い、利用者の状態状況に適した介護を考える」ということである。授業では事例を使って、情報、分析、解釈、統合化、課題の抽出、目標設定、計画立案、実践、評価を演習した。60時間を4人の教員で分担し、3事例をそれぞれ2コマ続きで4回合計16時間8コマの授業を行った。事例での演習では学生は4グループに別れ、教員がそれぞれスーパーバイザーとして加わった。授業ははじめに、2コマを使って、1年次の総論の復習を行った。その後、脳性麻痺の障害者T氏の事例、次に、本報告者の特別養護老人ホームで生活する高齢者H氏、3番目にパーキンソン病の高齢者M氏の

事例を使って、ワークシートを作成していく授業を行った。最後の2コマは学生のグループ討議を通して、介護過程の習熟度を自己評価する時間とした。事例担当教員は3名で、事例を1つずつオムニバス方式で担当した。

③介護過程Ⅲ

「介護過程Ⅲ」のねらいは「他職種の役割や機能を踏まえ、介護場面でのチームアプローチを学ぶ」というものである。はじめ、チームアプローチについて、講義をし、事例から学んだ後、ケアマネジメントと介護過程との関係を学習した。

次に、この年、特に力を入れたこととして、実際の介護現場のチームアプローチについて学ぶため、本学近隣にある社会福祉法人三育ライフシャローム若葉の年1回行われる職員の研究発表大会である「第7回シャローム若葉研究発表会 地域と福祉の安心架け橋—笑顔の挨拶 職場から—」に2年生

全員と担当教員で参加したことである。そこには地域の関係施設、協力者等外部からも多くの参加者が集っていた。この発表会の講評を本学教授が行い、地域施設と本学との連携を図った。そこで、地域包括支援センターをはじめとし、デイサービス事業所、訪問入浴事業所など6つの研究発表を聞き、用意したワークシートを作成させた。後日、チームアプローチについて気づいたこと・参考になったことをまとめ、それぞれの発表内容について感想を書かせ、グループに別れ、話し合いをし、発表をさせた。

また、専攻内の教員の中からケアマネージャー、介護福祉士、看護師の資格を持つ者によって、各職種の業務内容の理解と連携について講義をした。

#### ④介護過程Ⅳ

##### a. 概要

「介護過程Ⅳ」のねらいは「実習での事例を振り返り、介護過程展開の意義や方法の理解を深める」である。学生をグループに分け、地域介護福祉専攻の全教員が各グループを担当した。

授業の第1回目は第Ⅲ段階実習と第Ⅳ段階の間の帰校日に行った。「介護実習Ⅳに向けて～実習課題(介護過程の展開)の進捗状況～」というワークシートを用いて、受け持ち利用者の基礎情報、受け持つことにした動機、利用者の全体像とその時点での目標、計画、実習全般について困っていること悩んでいる事等を記入し、グループで話し合い、振り返りを行った。第2回目は第Ⅳ段階の実習を終えて、11月に入り、全体で事例研究に向けてのオリエンテーションを行なった。第3～12回目は8グループに分かれ、事例研究、発表原稿作成などの発表会の準備を行った。第13～15回は事例発表会に当てられた。評価も各教員が行った。

##### b. 要項について

そして、学生はグループに分かれ、各グループを1名の教員が受け持って実習で展開してきた介護過程事例を振り返り、その意義や方法の理解を深めるため、全教員が参加する授業となった。そのコンセンサスを得るために、教員向けに要項を作成し、専攻会議において説明をした。「介護過程Ⅳ」授業目標を確認し、「介護過程の展開」の振り返りの意義、事例研究の流れ、報告書作成マニュアル、発表の意義について要項の中にまとめられている。

「介護過程の展開」の振り返りは介護現場で知識・技術の水準を保つ一つの方法としてある事例検討会をあげ、学生同士で振り返る事で、利用者に関する情報を違った角度から解釈・関連づけ・統合化ができる。支援内容を多面的に捉え直すことができる。記録を発表することでわかりやすい文章表現の重要性がわかる。介護過程の評価の再評価をする。以上の点から事例研究は意義のあるものとして考え、授業を行った。

「事例研究」は事例検討と事例研究を区別して考えた。それは利用者の問題解決に向けて、学生が利用者やその状況や環境をアセスメントする。そこでは利用者やその状況や環境を学生や教員が理解しようとする。つまり、利用者が検討の対象となる。この過程を「事例検討」とした。学生が問題をどのように捉え、どのように関わったか。その学生はどのように問題をとらえたのであろうか。どのように関わったのであろうか。なぜ、そのように関わったのであろうか、といったことが、学生と教員との間で話し合われる。また、その時の学生の問題のとらえ方や関わり方に対して、利用者はどのように反応をしたのであろうか、学生の側が検討・研究の対象になる。この過程を「事例研究」と呼ぶこととした。

さらに、教員のスーパーバイズの指標を示した。一つ目は実習生のための支援になっていなかったか、実習生ができることに限定し、利用者の生活とかけ離れた計画ではなかったか、利用者が決定したものだったか、自立支援に繋がっていなかったか等のケアマネジメントの理念をあげた。二つ目は一般の家庭や介護現場で普通におこなわれていることを行ったかというノーマライゼーションなど社会福祉の理念に照らす。三つ目はアセスメントができていたか、計画評価などの意味がわかって実施できていたか。四つ目に情報についての知識は充分だったか、文献、他教科の教科書などで調べるということをあげた。

次に報告書の作成のマニュアルについて示した。これは今後、介護福祉士となって現場に出ても、パソコンを駆使できることが求められる上に、決められた書式に則り、報告ができる力を養うためには必要と考えたからである。書式は報告会や学会で用いられている一般的なものにした。



最後に「発表するという事」について触れた。プレゼンテーションをするということは、報告書づくりと同様、介護福祉士がより専門性を高めていくために必要な能力である。ある特定の目的に基づいて、限られた時間の中で、効果的に情報を伝達し、その結果として、判断や意思決定をしてもらうための積極的な動機付けを行う、コミュニケーションの方法と示した。

以上の様なレジュメをもとに8つのグループで事例研究を行い、発表会を行った。

### c. 発表会

発表会は学生が卒業研究を提出し、卒業共通試験を終えた2月21日(月)地域介護福祉専攻の授業としては初めての規模のものであったため、L棟レクチャーシアターを使用して行われた。介護過程Ⅰの授業として1年生が参加し、2年生、専攻科、教員の96名で行われた。

報告書は表紙をつけ、グループごとに発表会の人数分印刷し、各グループの全員分を綴じ、当日配布できるようにした。発表者は各グループ1名ないし2名で合計10名であった。

発表会当日の感想の代表的なものをあげると、「自分以外の人介護過程の展開を聞いて、自分に足りなかった部分などを知ることができた」「対象者の数だけ支援の方法はあるのだと実感した」「その方がどんな生活を送ってきて、どんな価値観なのかまで理解することで初めてその方に合った支援ができるのだと思いました」「実習を改めて文章化していく中で、この点はどうであったかなど考えて、それについて学び直すことができてよかったです」「実習が終わってしまうと、自分たちが立てた計画ができなくなったりしてしまうと知り、よい結果が出ても続けられないのがもったいないと感じました」等である。

## 3. 考 察

以上の学習を行い、2年間の総括として考察されることをあげてみた。

まず、担当教員は多面的なアセスメントを指導していくために、全科目の基本的な知識が必要とされる。しばしば、医学分野の知識不足により、答えられない場面があった。

次に、実習生の事例であげられた中に、本来、現場の職員が気づくべき課題を実習生が見つけ出していることが少なくないことに気がついた。まだ、現場では施設単位の集団的な介護が行われがちで、自立に向けての個別介護の視点が定着しているとはいえないと考えられる。しかし、個別介護の視点が介護する側もされる側にも、快であり、手間も省けるのであるが、余分な介護をしている。例えば、ある実習生は鉛筆を持って、字を書けるなら、箸を持って食事の自力摂取ができるであろうと考えたが、職員は気づいていなかった。また、本報告者が「介護過程Ⅱ」で取り上げた事例は実習生が利用者は幼稚園の先生をしていたなら、ピアノを弾くことが出来るのではないかと気づき、そこから展開した。職員はそうした個別介護の視点を生かし切れていなかった。

介護福祉士は毎日繰り返される利用者の何気ない生活の中から、気づき、問いを立て、アセスメントを進め、計画、実施をし、評価していく。厚生労働省で示された「求められる介護福祉士像」の中に「現場で必要とされる実践能力」「自立支援を重視し、これからの介護ニーズ、政策にも対応できる」「心理的・社会的支援の重視」「予防からリハビリテーション、看取りまで、利用者の状態の変化に対応できる」「『個別ケア』の実践」とあげられている。医療職の専門家の気づきは医療的で、例えばバイタルの変化から体調に気づく。介護福祉士の気づきは利用者が主体的に送る生活的気づきではないだろうか。利用者のできること、長年してきたこと、その人らしさに着目した気づき、表情や感情や生活機能を読み取り、その人らしく生活を送ることが出来るよう、利用者の過去、現在、未来の人生全体を支える。ここに介護福祉士の高い専門性があると思われる。

介護福祉士養成では前出の厚生労働省の見直し案で「資格取得後の現任研修等に寄る継続的な教育を視野に入れた内容とする」とある。それには資格取得時には「求められる介護福祉士像」に自分で向かっていく力をつけることが肝要である。その力を養うためには「介護過程」の学習は非常に有益である。

学生の多様化の傾向に伴い、社会人としての良

識・常識・公德心の不足している学生の増える傾向が指摘されている。学びの方法を学ぶ、つまりリテラシーを学ぶということが大学生の基礎教育として昨今言われている。何らかの問題が生じたときにどのようにしたら、解決していけるかの方法を学ぶ。これは「介護過程」に非常に通じるものがある。基礎教育としての位置づけが考えられる。介護過程のⅠ～Ⅳの2年間の授業を通し、学生が変化していく様子を見て、解決していこうと先を見通す力が「介護過程の展開」を実践することにより養われると感じた。「資格取得時の到達目標」に留まらず、厳しい社会に出て、社会人として生活し、働きがいを見出し、働き続け、「求められる介護福祉士像」に近づける介護福祉士を養成するためには「介護過程」という科目の持つ意義は大きい。

#### 引用・参考文献

- 1) 根本曜子 古川繁子 (2011) 『「介護過程」授業研究 (2年目の取り組み) -リアクションペーパーから見る学生の理解過程-』植草学園短期大学研究紀要 第12号
- 2) 厚生労働省『介護福祉士養成課程における教育内容等の見直しについて「求められる介護福祉士像」』(2008)
- 3) 介護福祉士養成講座編集委員会編集 (2009) 『新・介護福祉士養成講座9「介護過程」』中央法規出版
- 4) 谷川和昭 井上深幸 趙敏延 (2005) 『Skill Training Seminar in Social Work』関西福祉大学
- 5) 川廷宗之他編 (2011) 『プレステップ10基礎ゼミ』弘文堂
- 6) 本田由紀著 (2009) 『教育の職業的意義 -若者、学校、社会をつなぐ』筑摩書房

資料 介護過程Ⅳ 要項

介護過程Ⅳについて

序 介護過程Ⅳ授業の目標

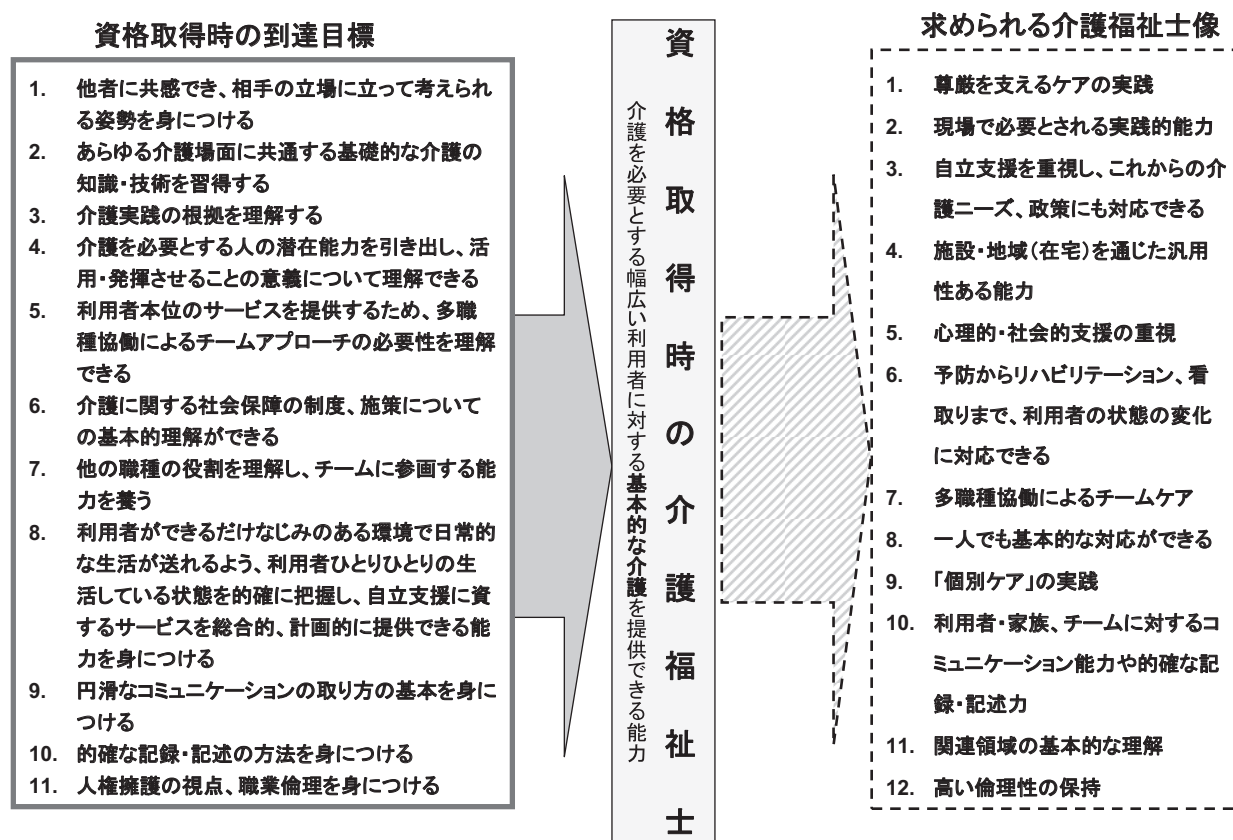
介護過程Ⅳの授業は実習中に実践してきた『介護過程の展開』とその記録を基に、学校に戻ってきてから、その実践の意義や目的などを再確認するため、次の4つの作業を通し、介護福祉士としての望ましい資質やスキルを獲得していきます。その一連の作業過程の中で、介護過程の意義を学ぶことがこの介護過程Ⅳの授業の到達目標です。

介護過程Ⅳの授業では、実習中に展開してきた「個別介護過程」を①振り返り、②事例研究し、③報告書にまとめ、④発表します。それぞれの段階で基本的に共通認識しておきたいことを、ここではまとめました。

《求められる介護福祉士像と資格取得時の到達目標》

介護福祉士としての望ましい資質とスキルについては、介護福祉士養成施設協会が出している、「養成の目標」から『求められる介護福祉士像と資格取得時の到達目標』を参考として、あげてみました。

養成の目標



## 第1章「介護過程の展開」の振り返り

介護福祉士は、介護現場において知識・技術において高い水準を求められています。高い水準を保つ一つの方法が事例検討会（ケアカンファレンス）です。事例検討会では、利用者に関する情報を他のスタッフに報告することによって、利用者の今後のあるべき方向について多面的に理解し、よりよい援助を考えることができます。

同じように学生においても、学生同士で介護実習の振り返りを行うことで以下の内容が整理できることとなります。

1. 利用者に関する情報の精査や違った角度からの解釈・関連づけ・統合化ができる。
2. 利用者への支援内容（計画、実施）を多面的にとらえ直すことができる。
3. 記録を発表することでわかりやすい文章表現の重要さがわかる。
4. 介護過程の評価の再評価をする。

以上を参考に、発表を通じて自らの振り返りを行って下さい。

## 第2章 事例研究

介護過程を実施し、評価したことを踏まえて、事例研究をします。

事例を考えるとき、事例検討と事例研究を区別する必要があります。これはアセスメントと評価を区別することに似ています。アセスメントは「利用者あるいは利用者を取り巻く状況や環境の理解」に関することで、評価は「学生の関わり」に関することです。「利用者理解」のためにはその利用者と利用者を取りまく状況や環境を理解しなければなりません。

### (1) 事例検討

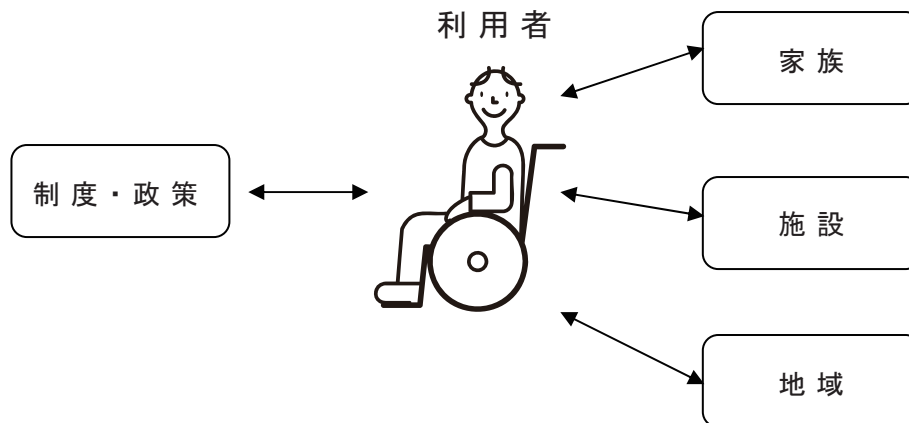


図-1

図-1では「その利用者は?」「その家族は?」「その施設は?」「利用可能な制度やサービスは?」といった疑問から、利用者の問題解決に向けて、学生が利用者やその状況や環境をアセスメントします。そこでは利用者やその状況や環境を学生や教員が理解しようとしています。つまり、利用者が検討の対象として、いわゆる“まな板の上に乗っている”こととなります。この過程を「事例検討」と呼びます。

### (2) 事例研究

次に、状況や環境の中における利用者を表した図の中に学生とその関わり（介護過程の全体）を加えて図示すると図-2の様になります。



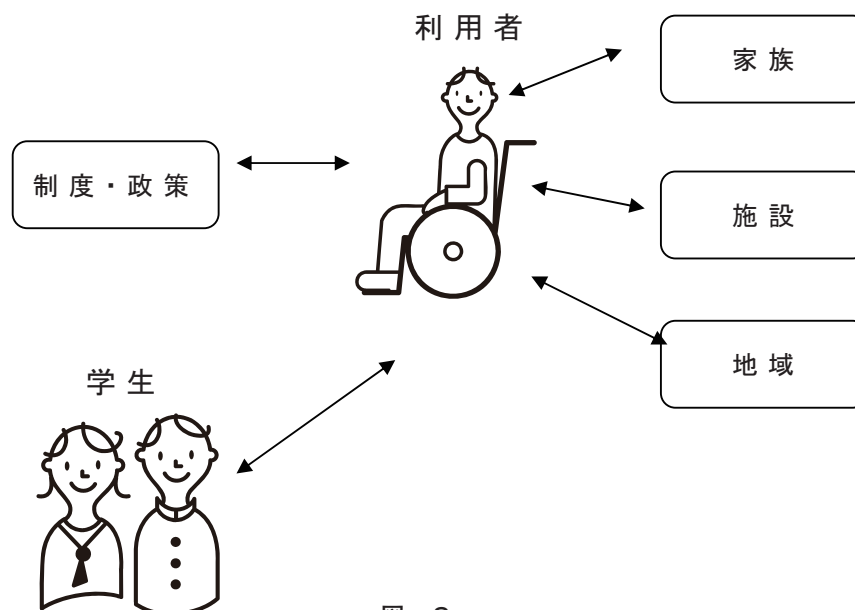


図-2

この図-2の中の矢印は「学生が問題をどのように捉え（アセスメント）、どのように関わったか（計画と計画の実施）」を示しています。

その学生は「どのように問題をとらえたのであろうか?」「そのように関わったのであろうか?」「なぜ、そのように関わったのであろうか?」といったことが、学生と教員との間で話し合われます。また、「その時の学生の問題のとらえ方や関わり方に対して、利用者はどのように反応をしたのであろうか?」といった具合に、あくまで学生の側が検討・研究の対象になります。学生がいわゆる“まな板の上に載っている”こととなります。この過程を「事例研究」と呼びます。あるいはこの過程を「スーパービジョン」と呼ぶこともあります。

このような取り組みから新たな発見や研究課題が明らかになり、介護福祉の研究が発展していくものと考えられます。

### (3) スーパーバイズの指標

スーパーバイザーは以下の指標に照らし合わせてみます。

#### a. ケアマネジメントの理念

利用者主体だったか：実習生の計画のための支援になっていなかったか。

生活の継続の支援だったか：実習生ができることに限定し、利用者の普段の生活とはかけ離れた計画ではなかったか。

自己決定の尊重：利用者が決定したものだったか、実習生のためにやっていたか、やっていたか。

自立支援に繋がっていたか。

#### b. ノーマライゼーションなどの社会福祉の理念

一般の家庭や介護現場で普通におこなわれている様なことを行ったか。

#### c. 自分はアセスメントができていたか、計画、評価などの意味が分かって実施できていたか、記録できていたかを確かめていく。

#### d. 情報についての知識は充分だったか、文献、他教科の教科書などで調べる。

### 第3章 事例研究報告書の作成

以上の様に事例研究したものを報告書にまとめます。代表的な報告書のまとめ方は以下の通りです。

#### (1) タイトル

事例研究の取組を的確に表し、短く、簡潔で、理解しやすいものにする。

Key Word（対象、目標、方法）をあげてみると考えやすい。

サブタイトルなしの方がすっきりしているが、サブタイトルをつけるとわかりやすい場合はつけてもよい。

#### (2) はじめに

対象者を選んだ理由、長期目標を設定した理由を述べる。

事例研究を深めるために行った研究を、事例紹介に先だって簡潔にまとめる、または触れておく。その研究内容は事例紹介、介護過程の展開で参考にし、言及する場合もあるが、特に考察では必ず言及する。

#### (3) 事例紹介

情報、アセスメント結果、全体像等から作成。

受け持ちの利用者を理解するのに必要な情報から抜粋する。

#### (4) 介護過程の展開

ニーズ・課題をあげ、解釈・統合化・可能性を記述する。(根拠と仮説)

1つの短期目標を選び、計画、実施内容、評価をする。

#### (5) 考察

①本事例研究が先行研究によって裏付けられたものか、目的、考え方、方法が適切であったか、介護過程の展開の視点にかなったものか、を考察する。

②介護過程全体の評価（長期・短期目標の達成状況、生活課題の解消状況。今後の介護支援の在り方）

#### (6) 参考文献

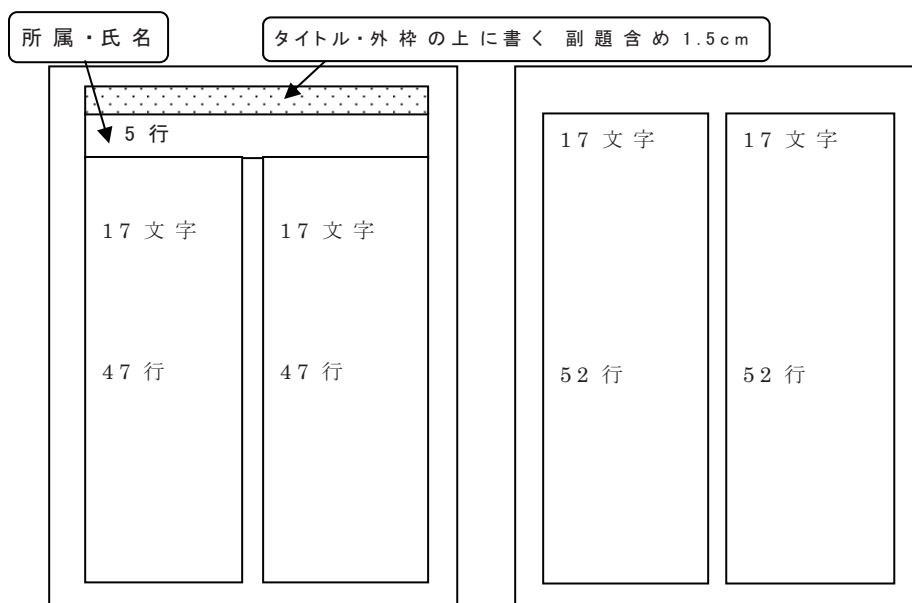
著者、書名、発行年、出版社、ページ

#### (7) 書式

①手書きの場合 ペン書き

コクヨ コピー用箋A5 5mm方眼 コヒ-15DN 使用

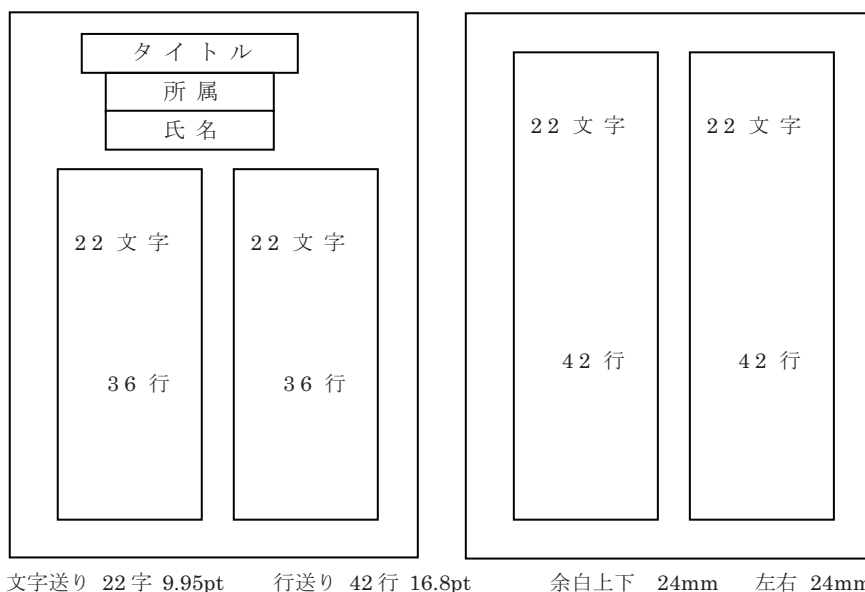
3,366文字



②パソコンの場合

A4 2枚 ワープロ 2段組み 22×42×2 3,432文字

明朝体 タイトル14pt 所属、氏名、本文 11pt



#### 第4章 発表するという事

この授業で、発表するという事は、各グループに分かれて①グループの中で個人の事例を紹介する時、②グループ内で個人の事例を検討した後分かったこと、調べたこと、深めたことなどを報告用の記録としてまとめたものを分かち合うためにグループ内で発表する。③グループから各1～2事例を選出して、介護過程Ⅳを履修している学生全体に対して発表する。という3回の発表があります。

発表の意義を深めるために、ここでは、プレゼンテーション能力について、プレゼンテーションの活用場面や具体的な方法について、ねらいに沿って共通に認識しておきたいことを記述します。

##### (1) プレゼンテーションとは

プレゼンテーションとは、「ある特定の目的に基づいて、限られた時間の中で、効果的に情報を伝達し、その結果として、判断や意思決定をしてもらうための積極的な動機付けを行う、コミュニケーションの方法」です。

したがって、プレゼンテーション能力とは、自分の考えや意見も含め、様々な情報を、人前で効率よく報告したり、発表したり、提案したりする能力であり、伝えたい情報を正確に伝達して理解してもらいます。

##### (2) プレゼンテーションの活用場面

- ①利用者に対して
- ②ケースカンファレンスやチーム・ミーティングにおいて
- ③理事会などの組織の運営者や経営者に対して
- ④地域の住民や組織に対して
- ⑤自治会や助成団体に対して
- ⑥一般市民に対して

##### (3) プレゼンテーションに必要な事柄と能力

- ①内容と構成
- ②話し方と態度
- ③視覚的資料の活用

